手厚く迎へ、而も之を生きながら喰つたのである。之を憫んで、ローケーシュヴラは、毎月、大白馬に變じて島に降り、求むる者は、其の體といはず尾といはず、足から鬣に至るまで嚙り着くと、馬は、翼もなしに一飛躍して、印度本土に之を伴つたといふのである。之をネアク・ペアンで見るのであるが、之程符合する實證があるので、此の複雜になつてゐる聖殿が、ローケーシュヴラの爲に建てられた事は疑を容れないのである。

新しい方面は、こゝまでの事であつたかといへば、取出した遺跡を巨細に調べ、幸にも偶然な發見で、フィノ氏が、全然新說を得て之を出版するに至つたが、此の說は、バイヨン建設當初の目的に關して確かであると信ぜられてゐた考を覆すものである。(フィノ著、印度支那のローケーシュヴラ——フランス極東學院創立第二十五年紀念出版『アジア研究』、〔一九二五年〕、第一卷、二四五頁以下)。婆羅門の銘文を信じて、アンコール・トムの中央寺院は濕婆神の爲に建てたものと考へてゐたのが、終に覆される事になつた。實際濕婆教徒は、九世紀末以來之を侵略して、其の龕や破風にあつた佛像を悉く削り取つたの